わたしと産地の今日をむすぶ

産直365 さんろくご

2022年
9月2回号
（A週）
白露

pal*system
もっといい明日へ 超えてく

特集
天候被害を乗り越えて

Contents.

エコ・りんご（つがる）
うもれ木の会のエコ・梨
エコ・小松菜、グリーンボックス
エコ・バナナ（バランゴン）
こんせん72牛乳

りんごのシーズンが
今年もスタート!

雄勝（秋田）・天童（山形）・米沢郷（山形）・さみず（長野）・青木（長野）・サンファーム（長野）

コトコト	きなり	きなりセレクト
264	196	341801

エコ・りんご（つがる）
850g **448**円（税込484円）
果皮の色がグリーンがかってさわやかな味わいです。3-4玉でお届け。

取材した人
下川英紀（ひでのり）さん
1969年長野県生まれ。31歳でりんご農家に転身し、今年8月から「サンファーム」の代表に就任。1男1女の父。

episode 1.
サンファーム（長野県）
長野市で1992年に設立し、今年30周年を迎えました。若手からベテランまで8軒の生産者全員が「エコ・チャレンジ」基準で栽培しています。2019年10月に台風19号で甚大な浸水被害を受けましたが、ひとりも欠けることなく「エコ・りんご」の栽培に取り組み続けています。

〝普通に〟収穫できるのが、いちばん

7月初旬の某日。例年ならまだ過ごしやすいはずの長野県も、この日は異例の猛暑に見舞われていました。生産者の下川英紀さんも「地獄ですよ」と汗をぬぐいます。

「久しぶりに潅水（かんすい）（水やり）してます。ここら辺は、スプリンクラーが水害で全部壊れちゃったから」

水害というのは2019年10月、台風19号がもたらした大雨による、千曲川（ちくまがわ）の氾濫のことです。サンファームでは生産者の家屋や貯蔵・出荷施設、りんごの園地が浸水し、甚大な被害が発生しました。

決壊した堤防のすぐ近くに自宅があり、全壊の被害を受けた下川さん。現在、21歳の長男が大学で農業を学んでいるそうですが「継ぐかどうかは別として、ここに住めとは言えません」と、その表情から笑顔が消えます。毎年のように起きる、天災や天候被害。規模を数字で語ることは簡単ですが、その数字のなかには一人ひとりの、いのちや生活があったのだと思い知らされます。

復興は、一歩ずつ着実にすすんできました。園地に堆積した泥を撤去した後、残った樹を整備し、新しい樹を植え直し、だめになった機械は買い直し……。2020年には生き残った樹が無事に実をつけたことに安堵したものの、翌2021年は大規模な凍霜害に襲われてしまいました。

「踏んだり蹴ったりですよ。りんご作り自体はやりがいを感じますが、天候に左右される仕事なので、その点は難しいですね。特別じゃなくていいから、『普通に』収穫できることを願っています」

水害後、地域では離農する農家も相次いだそうです。しかしサンファームでは、8軒の農家が欠けることなくりんご作りを続けています。「生きてるんだから、早く前を向いて、じゃんじゃん稼がないとね」と笑って話す下川さん。サンファームはこの8月、堀口貞夫（さだお）さんから下川さんへと代表を引き継ぎ、新たな門出を迎えました。

「堀口さんは技術も人格もすぐれた人。プレッシャーは重いけど、今まで以上のものを組合員さんに届けられるように、若手とも話しながら今後のあり方を探りたいと思います」

（写真／深澤慎平、文／西谷真実）

7月頭の「つがる」の園地のようす。写真中央にある「防霜ファン（扇風機の羽のようなもの）」を設置していた畑は、昨年の凍霜害の際、比較的被害を抑えられたとのことです。

2019年の台風通過直後、泥が堆積した園地のようす。パルシステムの職員や他産地の生産者もかけつけ、泥の撤去作業などにあたりました。今でも、流れ込んだ釘などで機械のタイヤがパンクすることがあるそう。

“奇跡の土地”で挑み続ける！

episode 2.

うもれ木の会（福島県）

福島県福島市の萱場（かやば）地区で、桃や「エコ・チャレンジ」栽培の梨などを手掛ける果実生産者の会。2021年は産地全体で深刻な凍霜害が発生し、今年は6月の降雹で一部の生産者の畑が被害を受けました。

取材した人

遠藤達寿（かつひさ）さん

1988年福島県生まれ。4人きょうだいの次男で、3年前に会社勤めから転身して就農。1児の父で、趣味はサッカー観戦。

遠藤さんが手掛ける梨は「幸水」「豊水」「あきづき」などおよそ8品種。実の味や大きさはもちろん、樹そのものの耐病性やしなやかさといった個性を見極めながら栽培しています。

就農直後に浴びた自然の洗礼

じりじりと日差しが照り付ける7月初旬の梨畑。出迎えてくれたのは「うもれ木の会」の生産者、遠藤達寿さんです。遠藤さんは家業に入って3年目。しかしこの2年連続で、天候被害に見舞われているといいます。

「去年はいちから梨作りに関わる最初の年だったんですが、4月の、さぁ花粉の交配をするぞというタイミングで霜が降りてしまって。花がボロボロ落ちていくのを見て『就農しないほうがよかったかな』と思いましたね」

ベテラン農家でも「あれを超えるものはない」と言うほどの大規模な凍霜害に出鼻をくじかれ、迎えた今年。霜の時期が無事に過ぎ、ほっと胸をなでおろしていた――矢先のことでした。6月頭、県内を襲った激しい「ひょう」が、摘果時期の小さな実に次々キズを付けてしまったのです。

「うちはまだマシなほうだと聞いてます。ひどいところでは6割以上、だめになったとか」

ひょう害を受けた場合、大きなへこみやキズが付いた実は落とさざるを得ませんが、軽微な被害果は樹に残します。ただ、たとえ小さなキズでも、育つ過程で割れや変形につながる可能性もあるそうです。

「でも当たったのを全部落としてたら、実がなくなっちゃう。仕方ないよね」と話すのは、遠藤さんの母・美恵子さん。収穫にたどり着いた実に残るスレやキズは、ひとつでも多く届けられるようにと、生産者が祈ったしるしともいえるのかもしれません。

不利な条件を、技術で補う

農業は天気以外にも、人の力が及ばないことがつきもの。そのひとつが「土質」です。かつて扇状地だった遠藤家の周辺地域は、「少し掘れば大きな石がゴロゴロ出てくるような」場所。水はけがよい一方で、肥料を入れてもすぐに流れ出てしまうため、土づくりが非常に難しいのだそうです。

「砂地の下に肥沃な土層があればいいんですけど、ここは石ばかり。長年堆肥を入れている人でも、何度も何度も耕して、ようやく10cmの肥沃な層ができるという感じです」

梨以外の作物は育たなかったというほど不利な土地で、今、梨が盛んに栽培され、味にも定評があるというのは驚きです。遠藤さんも「すごい奇跡ですよね」と目を細めます。

目下、土づくりを勉強中という遠藤さんですが、じつはもともと、家業を継ぐつもりはなかったそうです。きっかけになったのは、親の口から零れた「もうやめようか」という言葉。梨の樹は放っておくとすぐに病気の温床になるため、もし離農するとなれば、すべての樹を切らなければなりません。

「うちの梨を食べた人たちが『おいしかった』とか『ほかの梨が食べられなくなった』とか言ってくれていたので……ここでやめちゃうのも、もったいないなって」

厳しい自然の洗礼を受けながらも、よりよい梨作りに向き合う遠藤さん。うもれ木の会だけでなく、地域の先輩たちも目をかけてくれるというのも納得の、温かく誠実な人柄が垣間見えました。

（写真／深澤慎平、文／西谷真実）

エコチャレンジ

うもれ木の会（福島）

コトコト	きなり	きなりセレクト
257	185	341797

うもれ木の会のエコ・梨

2玉 **548**円（税込**592**円）

エコ・チャレンジ基準で栽培された幸水または豊水をお届け。500g以上。

ひょう害を受けた実。ひょうが当たったところがコルク状になっているのがわかります。

袋掛けがすすむ園地のようす。89歳になる遠藤さんの祖母も、現役で作業にあたっているそうです。

産地を襲った“今までにない風”

2019年9月、千葉県に台風15号が直撃しました。猛烈な風により、岡沢健男さんのビニールハウス34棟のうち、20棟が全壊。骨組みが歪んで倒壊し、ハウスの中で順調に育っていたみず菜や小松菜は廃棄を余儀なくされました。

「農業やって40年以上になるけど、今までにない風だった。もうどうしたらいいか、ショックだったよ」

台風被害は関東全域に及んだため、再建に必要なビニールや鉄などの資材と業者の人手が不足。工事が始まったのはなんと約1年後だったといいます。その間、解体は自分たちで行い、更地にほうれん草などを植えて経営を維持。農園の栽培管理を担当する、甥・松山新さんは「こんなに時間がかかるとは思わなかった。でも、農業はもう一度やり直すしかないからね。踏ん張るしかなかった」と当時を振り返ります。

新しいハウスのパイプはひとまわり太くし、以前は45cm間隔で入れていたパイプの間に1本追加。「被災前より強度を上げました。そのぶん費用はかかりましたが、台風はいつくるかわからないから。補強しておけば少しは安心できるかなと思って」（松山さん）

出荷体制は整ったものの、今年はビニールや肥料など資材費の高騰に見舞われています。「23歳で就農して、今年70歳。毎日必死にやってきたけど、この状況は限界だよ、正直」と肩を落とす岡沢さん。松山さんはうなずきながらも「それでも続けていくしかない。安定した生産をめざしていきたいです」と静かに前を見据えています。

（写真／豊島正直、文／小方恵実）

取材した人

岡沢健男さん、松山新さん

岡沢さん（写真左）：1952年千葉県生まれ。代々農家を営み、枝豆、小松菜など野菜を栽培。現在は出荷前の調整作業を行う。

松山さん（写真右）：1973年生まれ。15年ほど前、岡沢さんの体調不良を機に育った兵庫県を離れ就農。栽培管理の中心を担う。

episode 3.

佐原農産物供給センター（千葉県・茨城県）

1981年設立。2019年の台風15号で、葉物野菜を中心に、農業用施設も甚大な被害を受けました。「組合員の食卓を守りたい」一心で、被災後もほかの産直産地の協力を受けながら『グリーンボックス』の出荷を継続。組合員からのカンパで蓄電池を購入し、“前にすすむため”の設備投資などに充てています。

被災直後のようす。ビニールハウスの建て直しは1棟100万円ほどかかるといいます（大きさ、材料、強度により変動）。

エコチャレンジ

谷田部・有機農法ギルド・たまつくり・葉菜野菜・力毛太・野菜くらぶ・草の会・沃土・南埼玉・佐原八街・風土の会・鹿児島みらい

コトコト	きなり	きなりセレクト
311	228	341959

エコ・小松菜

1束 **148**円（税込**160**円）

環境に配慮した農業に取り組んでいます。おひたしはもちろん、あえもの、炒め物、みそ汁などにも。

商品ポイント +10

予定品目はカタログ本誌をご確認ください。写真はイメージです。

谷田部（茨城）・佐原（茨城・千葉）

コトコト	きなり	きなりセレクト
357	287	136310

グリーンボックス

8品 **948**円（税込**1,024**円）

産地自慢の旬の野菜を少量、多品目でお届け。ミニサイズやカットした野菜が入る場合があります。産地おすすめのレシピ付き。

台風直撃から8ヵ月、『バランゴンバナナ』の産地の今。

オルタートレード社（フィリピン）

1987年に「マスコバド糖」の民衆交易を担うためにネグロス島で設立。その後、砂糖だけに頼らない“経済的自立”を模索するなかで、地域に根差す在来種・バランゴンバナナに着目。化学合成農薬不使用のバナナ栽培は、ネグロス島を含む4つの島に広がっています。

2021年12月、超大型台風がフィリピン上陸

昨年12月16日から17日にかけて、フィリピン中部地域に上陸した非常に強い台風22号。北半球で観測史上3番目の強さを記録したというこの台風は、被災者1000万人超、191万棟以上の家屋倒壊という甚大な被害をもたらしました。

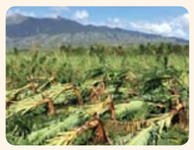
停電からの回復とともに、産地での被害状況が徐々に判明。とくにバナナは樹ではなく「草」なので強風に弱く、ネグロス島では約9割の株が被害を受け、ボホール島では全滅してしまいました。

世界中から届く支援、すすむ復興

台風通過から約8カ月。日本をはじめとする世界各国から届いた支援金により、家屋や生活の再建とともに、畑の復興が徐々にすすんでいます。

収入基盤であるバナナ畑の復活は、くらしを取り戻すうえで最優先事項。生産者だけでなくパッキングセンターのスタッフなどもいっしょになって畑を整備し、新しいバナナを植え、肥料をまき、復興作業にあたりました。バナナは順調にすくすく育ち、予定よりも早く出荷量が回復しています。

『バランゴンバナナ』は8月からカタログ掲載を再開しています



バナナ畑で鶏ふんをまくスタッフのようす

“日常”を止めないことが いのちの素を守ってる。

episode 4.

JA釧路太田（北海道）

北海道東部、ちょうど釧路市と根室市のほぼ中間に位置する産地。広大な土地を生かして、牧草を主体とした自給飼料も与えながら乳牛を育てています。夏でも冷涼な気候で健康に育った乳牛の生乳は、細菌数の少なさでは全国トップクラス。この乳質のよさが、牛乳のおいしさにつながっています。

牛舎に響く牛の悲鳴が今でも忘れられない

2018年9月6日未明に発生した北海道胆振（いぶり）東部地震。北海道では観測史上初となる最大震度7を記録し、「全道停電」という前代未聞の被害に見舞われました。当時の状況を、生産者の寺島亜矢子さんはこう振り返ります。

「すぐ復旧するだろうと思っていたんですけど、どうも様子がおかしい。朝7時、8時と過ぎたあたりから、事態の深刻さに気付きました」。タンクには前日までにしぼっていた生乳が貯蔵されていましたが、停電で冷却機能が停止。受け入れ側の工場も混乱のなか集乳に向かうことができず、タンクにあった約4.8tの生乳が廃棄処分となりました。

一方で、乳房炎を回避するためにも搾乳は続けなければなりません。しかし搾乳機が使えず、「じっと家で待つことしかできませんでした」と寺島さん。

停電当日、JA職員が発電機を携えて管内を駆け回り、寺島さんの牧場へ到着したのは夜9時を回ったころ。急ピッチで搾乳に取り掛かりましたが、「丸1日、乳を出せていない牛たちの鳴き声が本当に辛そうで、今でも忘れられません」。365日生まれるいのちの素だからこそ、日常を止めてはならない。寺島さんの言葉を通して、改めて生きものと向き合う仕事の厳しさを痛感しました。

刈り取り中の牧草の畑のようす。
寺島牧場では、デントコーンサイレージや牧草などの粗飼料を100％自給しています。

どんな苦難があっても牛のためにできることを

昨年末に報道された、生乳の廃棄問題。寺島さんは生産者として苦しい胸の内を明かします。

「頭数を減らしたりエサを減らしたり。生産量を減らす方法はあるかもしれませんが、そんな酷なこと、言葉も話せない牛に強いることができますか？」寺島さんの牧場では、乾乳（出産に備えて搾乳を休ませること）の時期を早めるなど、牛に負担のかからないやり方を模索しているといいますが、悲痛な面持ちで話す姿にこちらも胸が詰まります。

加えて、昨今の輸入飼料や資材価格の高騰。厳しい現実が、日本の酪農経営に甚大な影響を及ぼしています。

どんなに世情が苦しくとも、「私たちは牛のいのちをいただいているわけですから。彼らのためにできることをやるだけです」と寺島さん。「それにこの牛乳を待っている組合員のためにも、簡単にやめるわけにはいかないですよね」。

（写真／豊島正直、文／石塚千穂）

取材した人

寺島亜矢子さん

1970年北海道生まれ。サラリーマン家庭で育ち、22歳のときに夫・佳宏さんが営む牧場に嫁ぎ、就農。現在は夫と義理の両親の4人で、約160頭の乳牛を飼育している。

しぼりたてみたいな風味が自慢！

pal
冷蔵
特別価格
生乳/北海道（よつ葉乳業）㈱北海道

コトコト	きなり	きなりセレクト
107	107	341151

こんせん72牛乳

1000ml 219円（税込237円）

北海道根釧地区の生乳を72℃ 15秒間で殺菌。乳脂肪分3.6%以上。製造翌々日お届け。

アレルゲン 乳　142kcal 塩0.2g/200ml 消費 お届け日含む4日間

もっと知りたい！

column

牛乳を飲んで、酪農家を応援！

? “生乳の廃棄”問題はなぜ起きているの？

A コロナ禍の需要減が大きく影響しています。

2014年の深刻なバター不足を受け、業界では官民一体となって、乳牛の頭数を増やし、1頭当たりの乳量を増やす工夫にも取り組んできました。しかし、この効果が出てきたタイミングで感染症が拡大。業務用乳製品の需要が大幅に減少したため、生乳廃棄を避けるべく消費を呼びかける事態となりました。パルシステムの産地は、安定した注文に支えられて比較的影響は少なく済んでいますが、全国的には厳しい状況が続いています。

? 生産量は減らせないの？

A 牛たちも生きもの。すぐに減らすことはできません。

乳は毎日どんどん分泌されるものなので、搾乳を止めると牛は乳房炎などの病気になってしまいます。いのちある生きものを、簡単に「処分」もできません。産まれた子牛が、充分に乳を出すようになるまで約2年。いのちを扱う現場は、工業製品のような柔軟な生産量調整はできないのです。

? バターなどに加工すればよいのでは？

A 在庫にも限界が。酪農家の生活も守れなくなります。

保存がきくバターや脱脂粉乳など、乳業メーカーではできる限りの生産を行っています。しかし需要低迷が長期化し、処理能力と在庫量は限界間際。また、酪農家からすれば、加工用は牛乳用よりも安く買われるため、収入減につながってしまいます。「牛乳」の消費量を維持・拡大することが、酪農家を支える一番効果的な方法なのです。